

# 御伽草子の「いたはし」

染谷裕子

## 一 はじめに

前号において「いたはし」(以下便宜上カタカナ書きで示す)という形容詞が、御伽草子の作品の中で必ずといってよい程現れる語であることを述べた。これは、中古・中世作品にはない傾向であり、イタハシが御伽草子のキーワード的存在であることを示す。ただし、御伽草子と時代を同じくする謡曲・狂言・説経や『太平記』、『義経記』などの後期軍記物語にイタハシを見つけてはしばしばある。従って、御伽草子を含めた、これらの作品と、中世前期や江戸期の作品と比較することによってイタハシの室町時代の文芸作品における役割を考える必要がある。が、今その前に、御伽草子という場限定してイタハシという語が、御伽草子の性格とどう関わっているのかを検討していきたい。御伽草子の歴史は江戸期にも及び、板本等との比較によって、イタハシの室町期における役割をある程度予想できるのではないかと考えるからである。

他者に対する同情を表すイタハシは「通常では考えられないような不幸」に出会った時に使う場合が多く、それは読者の要求と関わるのではないかということを、前号では漠然と述べた。そのような傾向は否定できないのだが、右の説

明では必ずしもイタハシではなくてもよいような気がする。現に、アハレナリと表現することもあるのだから。また、それが明らかに「通常では考えられない不幸」ならばよいが、その判断は極めて主観的になりやすい。そこで、本稿では、このイタハシをできるだけ客観的な方法で見つめ直していきたい。なお、テキストは前回と同じものとする。今回はできるだけテキストの別本を参照するよう心がけた。

## 二 イタハシの類義語

さて、テキストに見られるイタハシは別の伝本を見ると様々な異同に出合うことがある。Aはテキスト、Bは別本である。特に断りがない場合は、『室町時代物語大成』（角川書店）からの引用である。

A ひめきみは……いはのうへにておめきさけひたまへは、なみをへたてて、はるかにきこえ、心のうち、おもひやられて、いたはしや（『岩屋の草子』）

B 姫君は岩の上に捨てられて、をめき叫び給へば、波を隔ててはるかに聞えけり。御心のうち思ひやられて、あはれなり。（同右・江戸初期絵巻・新潮日本古典集成）

A あらいたはしや、なんちは、そのやとにて、ふしきのひやうに、おかされて……（『天狗の内裏』）

B あらむざんや、なんぢは、ふしきのやまふ□、をかされて……（同右・丹緑本）

A いかになげかせたまひけん、御心の内も、いとをしく……（『しぐれ』）

B いかにわびさせ給はんすらむと、御心のうちも、いたはしくて……（同右・刊本）

これらを見ると、イタハシは、アハレナリ、イトホシ、フビンナリ、ムザンナリときわめて近い関係にある語であることがわかる。これ以外に、次のように同情を表す語としてカハユシの例を見たが、採集例が一例だったので除外する。

あこまるは、ちちもなき事を、かなしく、かわゆく、おもひつるに、われさへ、ふりすて、みなしこに、なさん

事こそ、かなしけれ（『狭衣の草子』慶長写本）

さて、この五つの語は当時どのような意味で使われていたのか。『日葡辞書』（『邦訳日葡辞書』岩波書店）を参照すると次のようにある。

イタワシイ ふびんに思われるような（こと）、あるいは、同情の念を催すような（こと）

アワレナ 不憫な（もの）、または、哀憐の情や同情の念を催させるような（もの）

イトオシイ 憐れみや同情の念を起こさせる（もの）、または、同情、かわいいと思う（もの）

フビンナ 哀れな（こと）、気の毒な（こと）、あるいは、哀れで同情を催されるような（人）

ムザンナ 同情と憐憫の情をそえられるような（人）、または、こと

多少意味の違いを見ることはできるが、「同情」という点でこの五語は一致していたようだ。

この五語のテキストにおける用例数は次の通りである。各語の下段は「さ」がついたもの。（イタハシは総数40例、さらにイタハシサは総数14例ということである。）

表1

	作品数	総数
イタハシ	18	40
	11	14
アハレ	21	171
	4	7
イトホシ	9	21
	1	1
フビン	9	14
	3	4
ムザン	2	6
	2	2

注意 アハレは総数に形容動詞以外に名詞33例、感動詞60例を含む。

アハレは、総数において他を圧倒するが、前回の調査によれば、中古・中世作品全体でよく現れる語である。そして、五語中最も広い意味を持つ語である。御伽草子でも、中世的傾向として悲哀の色が濃くなっているものの、イタハシとは比べものにならない多様な意味を持っている。が、ここではアハレそのものの意味内容に深く立ち入ることはせず、イタハシと重なる意味について比較していきたい。

また、アハレ、イトホシ、フビンは、「同情」以外に「愛情」を表す点で御伽草子で共通の意味を持っている。宮地敦子氏によれば、近代日本語以前の「愛」は目下に注がれるという傾向がある（『心身語彙の史的研究』明治書院）。その点で「同情」と「愛情」は極めて近い心理であるといえる。氏によれば、イトホシ、カハユシは、同情から愛情に移行した形容詞であるという。が、イタハシは愛情を表す例は見られない。次の例は他本で「いたはしく」の部分が「心あこがれて」となっている点からも、愛情にきわめて近い例であるが、やはり同情が主たる心理と思われる。このような例は御伽草子では珍しい。

なみたに、うす色のきぬも、ところどころいろへて、御けしきを、御覧すれば、やよひの柳の、いとみたれたる、ふせいして、なきふし給へは、見たてまつるも、いたはしくて、いつしかは、心うつりて、いかにも、物をいはせ、きかはやと、おほしめして……（『狭衣の草子』）  
ムザンも愛情を表す例はない。

本稿の目的はイタハシを探ることにあるので、他の四語と意味的に関わらない例は考察の対象から外すことにする。すなわち、「同情」という意味の形容詞・形容動詞に限定することになると、採集例は次のようになる。（イタハシサ、アハレサ、イトホシサ、フビンサ、ムザンサも含む。）

表 2

	作品数	総数
イタハシ	20	54
アハレ	16	53
イトホシ	5	9
フビン	7	12
ムザン	3	8

中古に頻用されたイトホシや、中世の説話や軍記物語によく見えるムザンは少ない。イトホシについては愛情の意に傾いていく史的傾向も関係するのであろう。なお、フビン、ムザンを多用しているテキストがある。フビンは『鉢かづき』に、ムザンは『横笛草紙』に多い。（これらの異本も概してその傾向がある。）作品の成立背景などが関わるのかもしれない。

さて、以上の類義関係にある四語と比較することによって、イタハシの性格を探っていくことにする。できるだけ客観的に考察をするために、次のような手順で考察することにする。

- ① 語法の違いとの関わり
- ② 主体の違いとの関わり
- ③ 対象の状況の違いとの関わり

### 三 語法上の違いについて

イタハシ以下五語の活用形の表れ方をまとめたのが表3である。

イタハシは、間投助詞「や」と結び付く傾向が強く、極めて短く「いたはしや」と終わるか、文頭に位置して感動詞的に用いられる場合が多い。一方で、終止形や係り結びの形で文末にくることはきわめて少ない。

それに対してアハレは、間投助詞と結び付くことは稀で、終止形や係り結びの形で文末に位置することが多い。次は右の双方の傾向を表している典型的な例である。

あら、いたはしや、御さうしは、よにしたかふ、ならひとて、きちしかたちをは、みきにもち、ひけきりの御はかせは、ゆんてのわきに、しのはせて、すそはつゆ、そてはなみたに、しほとぬれ、四十二ひきの、さうたに、うちましり、くたらせ給ふそあはれなる（『浄瑠璃物語』）

まず、同情に値する事柄にたいして感動詞的に直接的に表現し、以下その内容を述べてアハレナルとまとめている。そもそも、これらの言葉は「同情の感情」を表すのであるが、一方で「同情すべき対象の属性」を表すこともありうる。『形容詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所）によれば次のようである。

「かわいそうな」「きのどくな」「あわれな」「ふびんな」などの、あわれみ・同情を表わす語も一方ではあわれむべき対象の属性を表わすことがあると思われる。「みじめな」「ひさんな」などは、あわれみ・同情をさそいやすい

表3

ムザン	フビン	イトホシ	アハレ	イタハシ	
↓ さ 2 ↓ の 1 ↓ や 4	↓ さ 4 ↓ と 1 ↓ の 1	↓ さ 1 ↓ や 3	↓ さ 4 ↓ と 10 ↓ の 2 ↓ かな 1	↓ さ 14 ↓ の 1 ↓ や 20	語幹
	↓ に 2	↓ く 4	↓ に 11 ↓ なり 1	↓ く 15	連用形
↓ なり 1	↓ なり 3	↓ と 1	↓ なり 7		終止形
			↓ 係り結び 5 ↓ なる 6	↓ き 1	連体形
	↓ なれ 1		↓ 係り結び 6	↓ 係り結び 1 ↓ けれ 2	已然形

ような対象の属性であるといえようが、感情そのものを表わすことはないようである。  
 文末にくることが多いアハレは「同情すべき対象の属性」を表す性格を持つと言えるのではないか。  
 イトホシ、フビン、ムザンは採集例が少ないので比較にならないが、ムザンについては他本で「むざんや」の形を多  
 く見出すことができるのでイタハシに近いといえるかもしれない。

むざんやな、罪人共、ねつ鉄のほのふに、むせひしは、目もあてられぬ次第也（『天狗の内裏』江戸中期写本）

ところで、この五つの語の中、フビン、ムザンは漢語系の形容動詞である。この点が対象に対する待遇面に大きく影響する。すなわち、フビン、ムザンと発する対象には敬語は全く用いない。

なんちあまりになく、ふひんなれは、いまはかりは、ゆるすなり（『貴船の本地』）

いまはめにもみよ、おにとも、むさんなり（『鈴鹿の草子』）

一方、和語三つは、次のように敬語とともに用いられる。

いもなれさせたまはず、とうさひもわきまへさせたまはぬ物を、いかか今夜は八帝二逢ワセルノハゞいとをしくや（『しぐれ』）

このにしのはうに、こすいてんと申所に、おはしますねうこそ、まことに、こころほそけに、見たてまつるも、あはれにこそと申たまふ（『熊野の本地』）

いやしき家に、いらせ給へる、かたしけなくも、御いたはしく候（『狭衣の草子』）

特にイタハシは、接頭語「御」が付くことも多く、テキストの採集例のうち八割近くが敬語と共に用いられる。アハレとイトホシに「御」が付くことはなく、敬語と共に用いられることはイタハシほど著しくはない。

以上の点からイタハシは身分的に上位者に対する同情を表す場合が多い語であることがわかる。

#### 四 主体の違いについて

次に、五つの語が同情の意として用いられる場合の主体を調査すると、イタハシはアハレ、イトホシ、フビンと決定的な違いが見える。

アハレ以下三語の主体は次のように「神仏」となることがある。

やくしほとけの、これをあはれに、おほしめし、まんする、あかつき、御むさう、くたされけり（『浄瑠璃物語』）  
むまれさせたまひてよりのちは、けふこそ、はしめて、かちありき、ほとけも、いかはかり、いとほしく、御ら

むすらむ（『しぐれ』）

さりなから、心をつくすは、ふひんなり（鞍馬の毘沙門天の言葉）（『貴船の本地』）

イタハシにはこういう例は見えない。人間の感情なのである。

また、イタハシには次のように主体が一般的な人間であることはない。

かたへのくきやう、てんしやう人たち、ここかしこにたたすみて、あらあはれのことや、しんやうのゑのほとりに、つき日をおくりけん、ためしも、いまこそをもひしられたれとなみたをなかし申しけり（流され人となった兵衛のすけに対して）（『二本菊』）

あらいとほしや、いかなる人そ（物くさ太郎に辻取りされた女房に対して）（『物くさ太郎』）

イタハシは個人の感情なのである。

このことに関連して、イタハシの主体と対象の関係は、恋人、親子、主従等であつて、対象に対して思い入れの強い場合に用いられ（他の語も同様な傾向はあるが）、次のような対象との結び付きの弱い場合には用いられない。

たまたま、目撃した横笛の川への身投げに対して木売り童が出会った木こりに、

ちかころ、あはれなる事をこそ、見て候へ（『横笛草紙』）

かたわ者なので人に嫌われさまよい歩いているという鉢かづき姫に対して、

さてはふひんなり、いたきたるはちをとりてとらせよ（『鉢かづき』）

末摘花が花散里に対して、

いとかすならすまませは、わか身におもひしられて、いとをしとはおもへとも、よかれとまてはおもはず（『花

鳥風月』）

御曹司の重病をたまたま目撃した客僧が、

はや三七日になると、いきのしたより、申せしか、いまはむなしくなりつらん、むさんさよ（『浄瑠璃物語』）  
 というような例はイタハシには見えないのである。



以上のことから、イタハシは人間の、対象に思い入れの強い、個人の感情を表す語であるといえる。先に述べたように「愛情」を表す場合で共通するアハレ、イトホシ、フビンは、神仏の慈悲心や人間愛に関わる同情なのではないか。

## 五 イタハシの対象の状況について

イタハシという形容詞は、阪倉篤義博士によれば、「本来、自分自身の肉体や精神の苦痛」に用いられたものが、「対象を、自己以外の相手や第三者に広げて、そういう人たちのありかたを見て（あるいは考えて）、自分が精神的な苦痛を覚えたり、心を労したりすることを言うのにも、用いられた」語であるという（『日本語の語源』講談社現代新書）。この「苦痛」という原義が御伽草子のイタハシに強く影響しているように思われる。「余に御痛敷存」（『西行物語』）のような漢字表記も関連するのである。ちなみに『天正十八年本節用集』等の当時の辞書にもこの漢字があてられている。イタハシの状況は様々であるが、第一に、罪なくして捨てられる、流される、殺される状況に対象がある場合が最も多い。

あらいたわしや、なんじは、かちわらか、さんけんにて、あにのひやうへに、うたるへき（『天狗の内裏』）  
右のように讒言によって殺されたり、流される人間（『天神の本地』、『一本菊』）、継母に憎まれ捨てられた姫君（『朝顔の露』、『鉢かづき』、『岩屋の草子』）、重病なのに浜に捨てられる御曹司（『浄瑠璃物語』）等の様々な状況においてイタハシが用いられる。このような状況で他の四語が使われることは少ない。使われていても、先に述べたように主体が傍観者の立場である場合が殆どである。

第二に、本来の身分ならばしないことを何らかの原因でしなければならぬ状況にある場合が多い。  
いたはしや、いまならわぬ事なれと、よにしたかふならいとて、ゆとの、ひをそたき給ふ（『鉢かづき』）  
あら、いたはしや、御さうしはよにしたかふならひとて、きちしかたちをは、みきにもち（『浄瑠璃物語』）  
右以外にも親の成仏のために卑しい「いわず」と契りをこめる和泉式部（『浄瑠璃物語』）、恋しい相手に会うために習

わぬ旅路に行く高貴な男女（『文正草子』『浄瑠璃物語』）などに対してイタハシが用いられる。

第三に、最愛の相手に取り残された状況にある場合である。最愛の相手に死なれる人間（『厳島の本地』『鈴鹿の草子』『朝顔の露』）や、あるいは別れなければならぬ人間（『熊野の本地』『一本菊』）にイタハシが用いられる。この場合、次のように最愛の相手が第一の状況と関わっていることが多い。

ひしり聞召、千才王の△后ヲ殺サレテシマッタ▽御なげき、御いたはしく、おほしめし（『厳島の本地』）

なお、このグループは、他の四語と重なる場合が多い。

第四は、相手が病氣、重体、死の状況にある場合である。

いたはしや、御さうしはいまをかきりと、みえ給ふ（『浄瑠璃物語』）

かやうに、何とやらん、なやみかちにおはすれば、いたはしさに、しはしなと申てこそ候へ（『文正草子』）

△横笛ガ身ヲ投ゲタコトニシテ▽されは、此身の、くるしみを、おもひやられて、いたはしや（『横笛草紙』）

御伽草子ではイタハルという動詞は「西住法師、重病あて、いたはりける」（『西行物語』）の例のように、主として病気になる意味で用いられる。このことから、第四の場合が多いことを予想していたが、第一や第二の場合ほど多くはない。

以上、イタハシの主な対象について四つ述べた。ところで、罪なくして災難に遭うことも、身分違いのことをするの、愛する人と別れることも、病気になることも、不本意な不幸である。しかも対象には責任がない場合が多い。その意味で、不本意というより不条理の不幸といった方が的確である。先の四つに入らない次の例はどうであろうか。最初の例は本人の志が達せられない場合に、次の例は流され人との契りが人に知られる場合に用いられているが、どちらも相手にとって不本意であり、しかも責任はない。その意味でやはり不条理な不幸といえるかもしれない。

あらいたはしや、御さうし……もうしうのくもか、あつくをほつて、御こへはかりの、たいめんにて、いまた△父ノ▽すかたは見ゑざりけり（『天狗の内裏』）

これほとに、なりたることなれば、わかみの事は、とてもかくても候へ、御ためいたはしく候へは、はしめて人

にしられしと、思ふなり（『一本菊』）

また、「不条理な不幸」は同時に見るものにとっては「驚きあきれる」ことでもある。イタハシがアサマシという形容詞と共に用いられることがあるのはこの点を裏づける。

あらあさましや いたはしや（『物くさ太郎』）

あら御いたはしや、かかるはにふのこやに、御さ候はんことはあさましや（『天神の本地』）

あなあさましや……ひとへになき人のやうに、なけき給ふ、いたはしさよ（『一本菊』）

大わうの御子にたまはせとも、くわほうこそ、御いたはしく候へ、みつからか、はらにやとりて、かかるうきめを御らんし候事にあさましさよ（『熊野の本地』近世絵巻）

さて、以上のようなイタハシの状況と他の四語の用いられる状況はどう違うのか。先に述べたようにイタハシの状況と重なる場合もある。重なる場合についてそれぞれの語をイタハシと比較してみることにする。

状況が極めて類似しているのがムザンである。

イタハシの第一の場合であげた『天狗の内裏』の例は他本（丹緑本）ではムザンになっている。第二の場合は見えない。第三の場合と重なるものとして次の例がある。

むさんや、よこふへが、我思ひ立つ事を、ゆめほども、しるものならば、さこそ、かなしむべき物おと、よこふへか、のちの心を、おもひけるこそ、あわれなれへ出家によって別れることになる横笛を思いやつてゐる滝口の心中（『横

笛草紙』）

右の例は他本（古活字本など）では「いたはしや」となっている。

第四の場合にイタハシであげた横笛の身投げについて、イタハシとある一方で「むさんの物のありさまや」ともある。ムザンは、「文末にくることは少なく、「や」を伴って文頭に来る場合が多い」「神仏が主体となることはない」「愛情に用いることはない」という点でもイタハシに共通する。対象との心理的距離と敬語の使用という点で異なる。

ムザンは仏教語であり、「罪を犯して恥じることがない」というのが原義である（佐藤喜代治『日本の漢語』角川書店）。「破戒無慚」という用例が御伽草子（『西行物語』）にも見える。ところで、次のようにこの原義に極めて近い意味でイタハシを用いる例がある。

か程めでたき出家して、仏道修業しける物をうちさやなみける、罪の程こそ、思ひやられて、いたはしけれ（『西行物語』）

あまつさへ、物の、いのちをたち、あくこうを、つくり給ふは、いつの世にか、うかむへき、いたわしくこそ、おほゆれ（『雀の発心』）

共に「罪を犯して恥じることのない」相手に対する同情である。これはイタハシとムザンの関連性を示唆すると思われる。

イトホシの対象はイタハシほど、あさましい状況は少ないように思う。たとえば、次の例は、イタハシの第二の場合とも考えられる。清水寺へ参詣した姫君に対して若い女房たちが、

むまれさせたまひてよりのちは、けふこそ、はしめてかちありき、ほとけも、いかはかりいとおしく、御らんすらむ（『しぐれ』）

と言っている。本来なら「かちありき」などする身分ではないとの記述が前にあるが、イタハシと発する、遠く離れた所への、あるいは足が血だらけになったりする「かちありき」とは異なるように思う。ただし、刊本では右の例でイタハシを用いている。

イトホシは、もと自分のつらい気持ちにいうが、次第に相手がかわいそうだ、気の毒だという気持ちに傾いた語であるという（前掲書『身心語彙の史的研究』）。この点はイタハシと同じ経過を辿ったといえる。が、中世に入ると次第に愛憐さらに愛情をも表すようになった。これがイタハシとの大きな違いである。御伽草子でも愛憐・愛情を表すイトホシは多く見られる。また、一度イトホシと言った相手への気持ちが後に愛情へと変わる場合もある。イタハシは相手への

思い入れ（愛情）が前提となって起こる同情であることは既に述べた（第三節）。なお、同情のイトホシの対象は一例を除いて女性である。しかも、男性との関わりにおいて同情を受けている場合が多い。例えば、夫や恋人に忘れられたり、思わぬ男性から思いをかけられたりして、イトホシと同情されているのである。これは、後に愛情が主流となるイトホシの、同情の意味への浸食といえるのではないか。

フピンは「不憫」と書くのはあて字で、本来は「不便」と書くのが正しく、原義は「便にあらざ」の意味で「都合が悪い」ことをいう（『日本国語大辞典』）。もとは、自分にとつて不都合であったものが他者の不都合を思いやる同情へと変化したものと思われる。イタハシやイトホシと類似した変化を辿ったのである。御伽草子でも愛情の意で用いられることは先に述べた通りだが、イトホシと違い、男女間で使われることはなく、子供に対して、従者に対してというように、下降性を持つ愛情（愛憐）として使われている。この点は同情の意にも関係してイタハシの状況と重なることはあっても、上位者から下位者への同情という色合いが濃い。

△帝八道真ヲ刎刑スルニハ<sup>マ</sup>ふひんに、おもふ故、いけとり<sup>マ</sup>にして、おんるすへし（『天神の本地』）

また、総じてフピンは「何に対して」という意味での対象が次のように明確である場合が多い。その点で、「いたはしや」と直接的に表現することの多いイタハシと比べて、理性の働いている語のように思われる。

みなせことなりたることのふひんさよ（『鉢かづき』）

なんぢが、あつまにくたる事、ふひんにおもい（『天狗の内裏』）

いかて、むなしくなさんことのふびんさよ（『西行物語』江戸初期写本）

にほんの人たねたえてめつせん事こそ、ふひんなれ（『鈴鹿の草子』写本）

次に、アハレはどうであろうか。田中高志氏は『平家物語』のアハレの表れる場面を、「零落」「信仰の世界」「恩愛のさま」「別離」「死」「故事の説明」「合戦」の七つに分けた（『平家物語におけるアハレ』と『むざん』について、『国語教

育研究』7・昭38年11月)。先に述べたイタハシの第一、第二の場合は「零落」に、第三の場合は「別離」に、第四の場合は「死」の場面である。が、御伽草子の場合は、アハレは第二の場合は見られず、第一の場合は三節に述べたように主体と対象の関係が弱い時に限られている。次の例は、罪なくして海に沈められようとしている姫君に対するものである。

つらつらものを、あんするに、これもせんせの、ことはりそかし、ものおもふも、くるしきに、はやとくとくと、  
の給へは、あはれさかきりなし（『岩屋の草子』）

この場合主体は筆者で、対象との関係は云々できない。ただ、これは単なる同情というより、「はやく海に沈めよ」という悟り切った姫君の姿に半ば讚嘆の意味あいが含まれるように思われる。吉永亜美氏の指摘する悲哀と讚嘆のアハレに近い例である（『平家物語の△あはれ▽——王朝物語の継承と展開』『女子大國文』57・昭45年5月）。さて、イタハシの第三、第四の場合とアハレは重なることが多い。

さるほどに、みやこにて、此事△横笛ガ川ニ身投ゲシタコト▽をききて、女院も、小まつ殿も、あわれとや、おほしけん（『横笛草紙』）

△宮ト別レテ▽ちうしやうさたひらは、みやこに、ととまり給て、なけき給ふそあはれなる（『貴船の本地』）

野口進氏によれば『平家物語』でもアハレは別離と死の場面によく現れるという（『平家物語の△あはれ▽の考察』『金城学院大学論集』37・昭43年12月）。

ところで、御伽草子ではアハレはイタハシに比べて会話文（心話文）にあらわれることは少なく、次のような例は珍しい。

△姫君ガ▽はかなくなり給ひて、けふはや、十一日になり候、けにあはれなることかきりなし（『狭衣の草子』）  
△姫君ガ▽かきけすことく、うせさせ給へは、ちちの御なけき、かねておもふも、あはれなり（『岩屋の草子』）

前者は兄が妹の死を恋人の大将に話している場面、後者は姫君を海に沈めるよう命じられた武士が姫君の父の嘆きを思っている場面である。どちらも、同情に値する対象がその場面にいないのである。対象が直接現場にいる場合は、前

に述べたように神仏や一般の人間が主体である場合に限られる。直接相手にアハレと発することはないのである。この点が状況が似ていてもイタハシとは決定的に違う。

従って、アハレはイタハシに比べて客観性を帯びた表現のように思える。地の文での使用が多いことも裏づけになる。

また、別離や死には涙はつきものであるが、次の例に注意したい。

きさきの、ひらんはによは、なくも、なかなかせんかたなし、月日のやうなる、二人のむすめを、うしなめて、いきても何かせんと、我も、ともにと、なげかせ給ふそ、あはれなる(『貴船の本地』)。

アハレと述べているのは、后が二人の娘を失ったことに対してではなく、后が二人の娘を失って泣いていることに対してであろう。アハレは対象の「涙」と結びつく例がきわめて多い。

物語

たひし、なみたをな~~か~~して……いかなれば、丸は、ちちはましませとも、ははといふ人、ましまさすとおほせありければ、けうとんみ、あはれとおほしめして(『釈迦の本地』)

こおとこ……かきくとき、なみたとともに、かたり申せは、女はうさすか、いわ木ならねは、あはれに、おほしめしたまひ(『小男の草子』)

六に成児の、よにいつくしきか、はしり出て、あのこしき法師の我父ににたるそやとてな~~き~~けるもあはれなり(『西行物語』)

△首ヲ切ラレル后ノ御はら、すこしうこきて、やかて、むまれたまふ、玉のやうなる、わうしにておはしける、これを御らんして、御なみたも、さらにととまらず、あはれなりける事申中くたとへんかたなし(『熊野の本地』)

右の例のようにアハレは対象の涙を伴うことが多い。相手が何らかの不幸で泣き悲しむ、あるいは物思いに沈む場合に発せられるのがアハレなのではないか。やはりアハレは同情の言葉であると同時に悲哀を表す言葉なのである。一方、

イタハシは相手の涙を必ずしも必要としない。

## 六 まとめ

類義語との比較によって、御伽草子のイタハシについて次のような傾向を見出した。

- ① 直接的な表現として用いられる場合が多い。
- ② 敬語と共に用いられる場合が多い。
- ③ 人間の、個人的な表現である。
- ④ 対象に対して思い入れの強い表現である。
- ⑤ あさましい不幸に対する同情の表現である。

御伽草子は短編でありながら内容は長編的であるがために、その叙述は筋本位にならざるをえなかった。市古貞次博士は次のように述べている。<sup>3)</sup>

前代の物語の一つの特徴は、思ふにその綿々として公家社会に於ける貴族の生活・心理を述べる点にあり、悠々たる物語進行の中に醸し出される情趣性にあつたといはれようが、中世小説はさうした点においても、物語を遠く離れ、説話文学に近づいてゐるとみなすべきである。

従つて、イタハシのような直接的表現が好まれるのは当然であろう。しかし、それならば同じ傾向を持つムザンでもよい。

イタハシの③④⑤の傾向に注意したい。これらは読者を作品の世界にひきこむという働きをするのではないか。傍観者としてではなく、登場人物のすぐそばに位置するかのような気を起こさせる。同じ同情表現でも誰にでも「わかりやすい」「具体的な」表現であるように思われる。この点が語り物でよく使われる言葉になつた要因でもあろう。

また、②にも注意したい。当時は戦乱に明け暮れた時代である。公家の生活の零落のみならず、武士の世界に於いて



も、昨日の勝者は今日の敗者になる可能性がある時代である。そういう身分的に上位者の不幸は御伽草子の作者や読者にとっても身近なものであったと思われる。イタハシという言葉は当然日常生活でも発することが多かったと思われる。その意味で御伽草子のイタハシは時代を反映した言葉であるといえよう。一方、上位者の不幸をできるだけ個人のレベルで共感することによって、上位者との一体感を味わうという「貴種へのあこがれ」のあらわれであるとも考えられよう。

ところでやはり御伽草子で気になるのはメデタシという語である。市古博士はメデタシが中世小説、特に大衆的な庶民の小説に常套的に現れることを指摘している。そして、メデタシが「謡曲より狂言に多く用ゐられてゐるわかりやすい生きたことば」であり、「中世の国民的感情を表白する大切なことば」であると述べている。テキストに現れたメデタシとイタハシを洪川板二十三編と比較して示してみた(イタハシサ・メデタサは数に含まない)。

洪川板 二十三編	テキスト 二十三編	いたはし		めでたし	
		作品数	総数	作品数	総数
10	18	16	40	14	15
		54	81		

テキストにもメデタシは洪川板同様に多数現れている。が、イタハシは洪川板と大きな違いを見せる。菅野覚明氏は洪川板『御伽草子』は「いわば、太平の世に安住する中でめでたさを説いているのであり、この世界にあるあり方そのものを祝言として語ったものにほかならない」と述べている。戦乱の治まった近世の所産として洪川板をとらえている。その意味で、テキストに見られるイタハシの傾向は中世的傾向ということになろう。

市古博士は『鉢かづき』の興味の中心は「継子いぢめにはなくて、継母をもち生母を慕ふ美しい姫が、一旦いやしい婢女に身を落して、最後に貴公子に見出されるといふ明るい面にある」と述べている。一方、同じ『鉢かづき』に対して、桑原博史氏は、「家を出て苦しんでいるところに比重をかけている点の叙述に、物語の世界とは違った感触がある」

と述べている<sup>(8)</sup>。こういう暗い面があつてこそその明るい面が強調されるのである。御伽草子とはこの両面のどちらかが強調されるかによつて、中世的か近世的かが判断されるのではないか。イタハシがそういう暗い面を代表するように思われる。桑原氏はまた「人間世界の苦しみを見つめる目は、必然的に、作品の宗教性をもつてふちどることになる」とも述べている。御伽草子のイタハシはやはり中世的側面を表すキーワードなのである。

また、前号に示したようにテキストは「異本を多数持つ」「絵本の形態を持つ」「江戸初期までの写本を持つ」作品から選択したものである。一方で、御伽草子には古写本を持ちながら絵本の形態を持たない作品や、異本がほとんどない作品もある。これらは文学的に評価が高い個性的な作品であることが多い。また、近世になってから創作されたと推定される作品もある。以上のような作品にはイタハシが用いられることは少ない。

その意味で、イタハシは御伽草子的な御伽草子に表れる言葉であるように思う。そして室町時代の民衆（教養層ではないという意味の）の好む言葉であつたといえないだろうか。

## 注

- (1) 八木公生氏によれば『横笛草紙』のムザンは特別な意味がこめられているという（『横笛草紙』の語る夢「御伽草子物語・思想・絵画」ぺりかん社）。
- (2) イタハシは54例中31例、アハレは51例中13例が会話文で用いられている。
- (3) 『中世小説の研究』東京大学出版会。
- (4) 同右。
- (5) 数量のみならず、用法にも違いが見える。例えば、次の例のように、敬語を全く用いないイタハシが洪川板にはある。  
汝らがしほたれていふところ、いたはしく思ふ也（『猫のさうし』）
- (6) 菅野覚明「御伽草子の「祝言」性について」（『御伽草子 物語・思想・絵画』ぺりかん社）。
- (7) 注3参照。
- (8) 「物語から草子へ」（『国文学解釈と教材の研究』學燈社・昭52年12月）。

テキストについては前号で述べたが、参考までに簡略に示しておく。特に断りのない場合は『室町時代物語大成』一、十三（角川書店）に翻刻されているものである。なお、洋数字は『大成』の作品番号である。

朝顔の露（18）、巖島の本地（40）、岩屋の草子（50）、花鳥風月（92）、貴船の本地（110）、熊野の本地（117）、小男の草子（145）、西行物語（159）、狭衣の草子（170）、しぐれ（183）、四十二の物あらそひ（186）、釈迦の本地（195）、浄瑠璃物語（208）、雀の発心（219）、鈴鹿の草子（田村の草子）（215）、天狗の内裏（286）、天神の本地（291）、鉢かづき（汲古書院・影印室町物語集成・第一輯）、一本菊（334）、富士の人穴草子（346）、文正草子（赤木文庫蔵室町末写本・斯道文庫マイクロフィルム）、物くさ太郎（大阪女子大学蔵慶長頃絵巻・松蔭國文資料叢刊4）、横笛草紙（407）。

以上二十三作品の作品名は、松本隆信氏の「訂室町時代物語類現存本簡明目録」（三省堂『御伽草子の世界』所収）の書名タイトルに拠った。